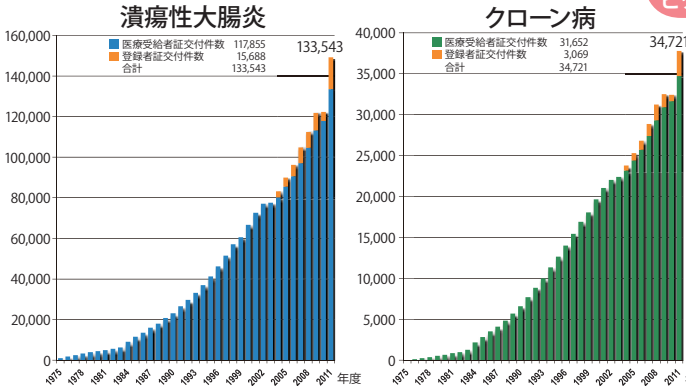




潰瘍性大腸炎・クローン病

■急増している潰瘍性大腸炎とクローン病(推移)

炎症性腸疾患—医療受給者証・登録者証交付件数—



すごく
増えている
ビッ!!

毎年おおよそ8,000
人増加していると報
告されています。

8,000人

©厚生労働省 平成23年度保健・衛生行政業務報告 (衛生行政報告例) 結果の概況 <http://www.bm.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/07/index.html> ©難病情報センター http://www.nanbyou.or.jp/what/nan_kouhu_1_win.htm#p01

■間違えられやすい3つの病気

	炎症性腸疾患		過敏性腸症候群 (過敏性大腸炎)
	潰瘍性大腸炎	クローン病	
原因	詳しくはわかっていないが、免疫の過剰反応ではないかと考えられている	詳しくはわかっていないが、免疫の過剰反応ではないかと考えられている	ストレスによる自律神経の乱れ
症状	・大腸のただれ ・腹痛と下痢 ・粘血便* ・発熱・倦怠感など ※粘り気のある血便。 (鮮血だと、痔の場合が多い)	・大腸のみならず、あらゆる消化管(口・食道・胃・小腸など)のただれ ・発熱・腹痛と下痢 ・痔ろうなどの肛門異常 ・貧血・倦怠感・体重減少など	・腹痛と下痢・便秘 ・便秘と下痢を繰り返す ・おなかにガスがたまる
治療	・炎症や症状を緩和する薬物療法 ・病状によっては外科手術も ※原因不明で完全に治すための治療法は確立されていない	・炎症や症状を緩和する薬物療法 ・病状によっては外科手術も ※原因不明で完全に治すための治療法は確立されていない	・ストレスをさけ、規則正しい生活を心がける ・うつ病など精神疾患との合併もあるため、心療内科での治療も有効
その他	特定疾患(難病)に指定されている	特定疾患(難病)に指定されている	緊張する場面などで、多くの人が経験したことがある症状



特定疾患(難病): 原因が不明で治療法が確立していない、いわゆる「難病」のうち、診断基準が一応確立し、かつ難治度、重症度の高い病気のこと。特定疾患に認定されると、その医療費が各自治体から助成される。

若者を襲う消化管の病気に「注意！」
潰瘍性大腸炎とクローン病

監修

東邦大学医療センター
佐倉病院 副院長

鈴木康夫 医師



「潰瘍性大腸炎」と「クローン病」という病気をご存じでしょうか?

これらは、厚生労働省から難病指定を受けている腸の病気で、近年、若い人たちの間で急増し、大きな問題となっています。

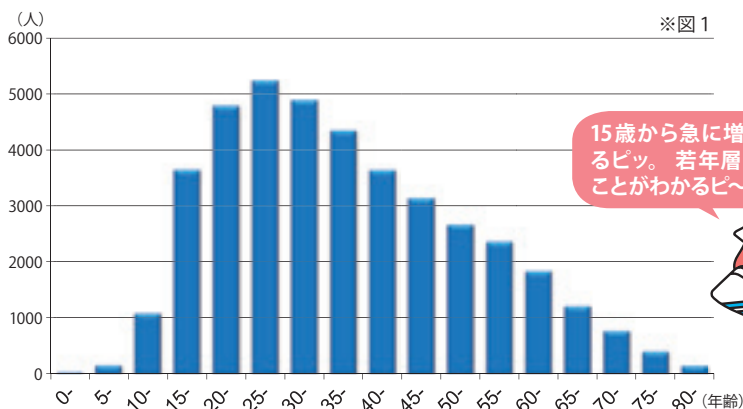
似ているようで全く異なる過敏性腸症候群(過敏性大腸炎)と炎症性腸疾患

日本では近年、腸の病気が急増し、食生活の欧米化に伴い大腸がんが増えたとされています。また、ストレス社会で下痢や便秘などの不調に悩む人も非常に多くなりました。その典型的なストレス性の腸の病気として知られているのが、「過敏性腸症候群(過敏性大腸炎)」です。

腸はとてもデリケートな臓器で、強いストレスを受けると、腸のぜん動運動が狂い、腹痛を伴う下痢や便秘が起こることがあります。通勤・通学途中や、重要な会議や試験の前にお腹が痛くなるな

「潰瘍性大腸炎」

■潰瘍性大腸炎はどんな年代に多いの？



15歳から急に増えているピツ。若年層に多いことがわかるピ〜。

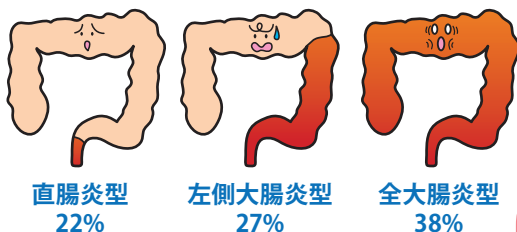


対象：臨床調査個人票（新規＋更新）提出者46,113人中、発症年齢の記載がある、あるいは発症年の記載があり計算が可能なもの40,642例
厚生労働省、2007年度臨床調査個人票集計資料

■炎症のタイプと主な症状は？

<炎症のタイプ(罹患範囲)>

潰瘍性大腸炎は、通常、直腸から広がっていきます。炎症の範囲によって、直腸のみに炎症が起こる直腸炎型、下行結腸にまで及ぶ左側型、横行結腸を超えて広がる全大腸炎型に大別されます。



※上記以外：10%、不明3%
※2007年度新規申請者のみの集計
厚生労働省、2007年度臨床調査個人票集計資料

<主な症状>

- ・繰り返し起こる下痢
- ・粘血便

進行すると…

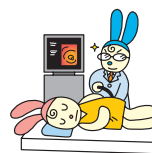
- ・腹痛・発熱・貧血・関節痛や皮膚症状(足首やすねに紅い腫れができたりする)などの腸以外の部位にも症状が現れることがあるのも特徴です。

肛門にいちばん近い直腸から広がっていく性質があります。



<検査方法>

「問診」のほか「便検査」「血液検査」「大腸内視鏡検査」などを行います。



便検査…便に含まれる細菌を調べ感染症との鑑別を行います。

血液検査…炎症や貧血の有無を調べます。

大腸内視鏡検査…肛門から内視鏡を挿入し、炎症の範囲や進行度を調べます。

※重症度は炎症の範囲だけではなく、排便の回数、出血の程度、発熱や貧血、頸脈などと併せて判断されます。

潰瘍性大腸炎とは？

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜に炎症が起こり、びらん(ただれ)や潰瘍ができる慢性的な炎症性腸疾患です。

主な症状は、「頻繁に起こる下痢」と、粘り気のある「粘血便」です。悪化すると腹痛や発熱・貧血・体重減少・関節炎などが起こることもあり、生活に大きな支障をきたします。

1973年に特定疾患(難病)に指定されている潰瘍性大腸炎は、かつては珍しい病気でした。ところがどういわけか、近年になって患者数が年々増加しており、中でも若い人たちの間で急増し、25〜29歳が発症年齢のピークとなっています。(※図1参照)

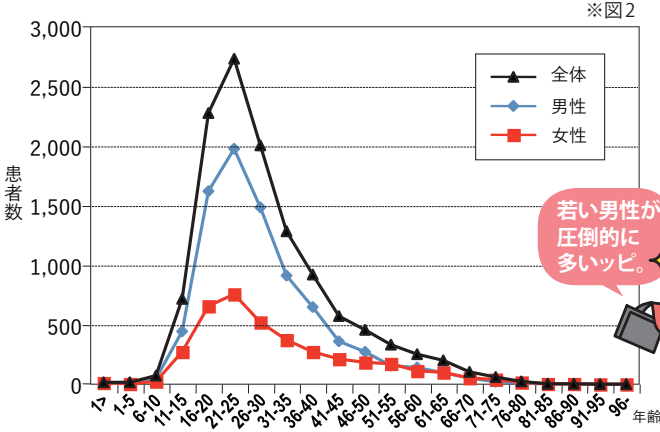
原因はいまだ不明ですが、自己免疫に関連した病気ではないかと考えられています。

ど、厄介な症状に悩まされますが、大腸に原因となる特定の病変がないのが特徴です。

これに対し、名前の響きは似ているものの、命にかかわることもある大腸の病気が「炎症性腸疾患」です。

「クローン病」

■クローン病の初診時年齢は？



名川弘一：難治性炎症性腸管障害に関する調査研究（日比班）平成18年度研究報告書別冊，2007

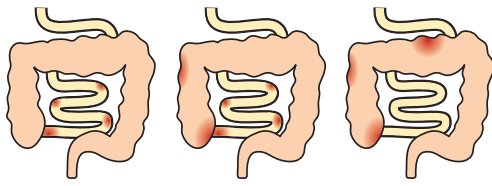


■炎症のタイプと主な症状は？

<クローン病の病型(罹患範囲)>

クローン病は、口から肛門まで消化管のいたるところで発症する病気ですが、頻度が高いのは小腸や大腸です。

小腸のみに炎症が起こる小腸型、小腸と大腸の両方に炎症が起こる小腸大腸型、大腸のみに炎症が起こる大腸型に大別されます。



小腸型 33% 小腸大腸型 45% 大腸型 20%

<主な症状>

- ・下痢 ・腹痛
- ・裂肛や痔ろうなど肛門に症状が現れる場合もあります。

進行すると…

- ・貧血・体重減少、成長障害などが起こる場合もあります。



<検査方法>

「問診」のほか「便検査」「血液検査」「画像検査」などを行います。

便検査…細菌やウイルスなどを調べ、感染症との鑑別を行います。

血液検査…全身の炎症反応や貧血、栄養状態などを調べます。

画像検査…カプセル内視鏡、バルーン小腸内視鏡やCT、超音波検査や磁気共鳴画像検査(MRI)などで調べます。

クローン病は「過敏性腸症候群」と診断されてしまうこともあります。しかし、血液検査をすることで炎症反応の貧血や栄養状態などを確認することができ、それらの検査データを総合して「クローン病」と診断することができます。



AGA Teaching Project 3ed. 2002

クローン病とは？

潰瘍性大腸炎と同様に、10〜20歳代の若い世代を襲う原因不明の炎症性腸疾患に、クローン病があります。(※図2参照)
ただしクローン病は潰瘍性大腸炎と異なり、口から食道、胃、小腸、大腸、肛門に至る消化管のどこにでも炎症が起こります。

典型的な症状は、繰り返す下痢と腹痛で、血便も見られます。さらに、肛門に病変が生じることが多いのもクローン病の特徴です。

腹痛がなくても、肛門の出口に近い部分が切れたり裂けたりする「裂肛」や、肛門内から周辺の体外へトンネル状の管ができてしまう「痔ろう」などがしばしば起こります。

また、クローン病はどこで炎症が起こっているかわかりにくいいため、大腸に異常が見つからないと過敏性腸症候群と間違われて診断されてしまうこともあります。

潰瘍性大腸炎とクローン病の治療

治療は薬物療法が中心となりますが、残念ながら今のところ完治が難しく、治療の目標は腸の炎症を抑え、症状が治まる「寛解」と呼ばれる状態をできるだけ維持

治療について

<潰瘍性大腸炎>

内科的治療として「薬物療法」「血球成分吸着除去療法」、外科的治療として「手術療法」があります。
(手術療法を検討する症例)

- ① 内科的治療では十分な効果が得られなかった場合
- ② 大量出血がみられる場合
- ③ 大腸が腫れ、毒素が全身に回ってしまう場合
- ④ 大腸がやぶれる「穿孔」
- ⑤ 癌化または、その疑い
- ⑥ 副作用のため、ステロイドなどの薬剤を投与できない場合

※ 手術では、基本的に「大腸全摘術」を行い大腸をすべて摘出します。

<クローン病>

内科的治療として「薬物療法」「顆粒球吸着除去療法」「栄養療法」、外科的治療として「手術療法」などがあります。
(手術療法を検討する症例)

- ① 経過中に著しい狭窄やろう孔、膿瘍などを生じ、内科的治療でコントロールできない場合

※ 最近では、抗TNF- α 抗体製剤の使用により、手術に至るケースが徐々に少なくなってきています。ただし、診断を受けたときに既に狭窄やろう孔が起きている場合などは、腸管を温存するために小範囲の切除や狭窄形成術が行われます。



膿瘍：膿みがたまった状態。
ろう孔：皮ふ・粘膜や臓器の組織に、炎症などによって生じた管状の穴。

潰瘍性大腸炎とクローン病を見逃さないで

この2つの病気は、主な初期症状が下痢や腹痛など一般的な胃腸病と似ています。そのため発病に気づかず、治療が遅れて進行させてしまうケースが少なくありません。

以下のような症状がある時は、ただの胃腸炎だとあなどらず、早めに受診しましょう!

《早期発見のためのポイント》

- 下痢が続く
- 腹痛が続く
- 便がだんだんゆるくなってきた
- ねっとりした血便がある

これは体からの重要なメッセージ。粘血便を自覚したら、すぐに病院へ!!



この2つの病は、病気にならないようにするための方法を断定できません。だからこそ早期発見が重要です。日々の体調の変化を注意してください!



ただの下痢だなんて、たかをくくってちゃダメだピッ!



持することとなります。
症状が治まっても、いつ再び炎症や症状が起こる「再燃」と呼ばれる状態が始まるかわからず、再燃を繰り返すほど症状が進行していくので、一度発病したら、治療を継続することが大切です。
また、早期に治療を始め、炎症さえ抑えられれば、健康な人と変わらない生活を送ることも可能になっています。
腹痛や下痢・便秘が続いたら、早めに消化器科の専門医を受診し、きちんと検査・診断を受けましょう。